

東帝文ニュース

EAST TIMOR NEWS No. 3

2001年9月21日

標高約、1,200メートルのエルメラは、霧の多い所です。彼は誰時（かわたれどき）と、誰ぞ彼時（たそがれどき）の違いが解る人が、おられるでしょうか？朝霧の中で向こうに見える人と、夕霧の中で向こうに見える人は、全く違います。ここエルメラでも、同じです。森鷗外（林太郎）と泉鏡花（鏡太郎）の違いでしょうか。林の向こうには、希望が有りますが、鏡の向こうには、絶望しか有りません。

8月30日、制憲議会議員選挙がありました。全く平和に行われました。投票するまでに3～4時間も待った人がいます。平均でも2時間は、かかったでしょうが、整然と行われました。まだ、最終発表はありませんが、90%を超える投票率でした。こんなに、高い投票率は、世界でもまれではないでしょうか。自分達の地域をより良くするための、最初の自由な雰囲気の中での選挙とはいえ、この初心を忘れていた地域が何と多いことかと、あらためて教えられました。

やっと私にも、知り合いが多くなってきました。というよりは、外国人の私を、知っている人が、どんどん多くなって行くな、ということに気が付いてきたと言うべきでしょうか。私の知っている人が、私を知っている人とは、当然同じ数ではありません。私を、見てしまった人が、私が知り合った人より比較級数的に増えてしまうのです。悪いことは、出来ませんね。酒と煙草と涙、以外は！

挨拶することが楽しいことだと、思う様になりました。ボン・ディーア（おはよう）、ボ・タルデ（こんにちは）、ボ・ノイテ（こんばんは）、オブリガードゥ・バラック（とっても有難う）、アテ・ログ（またね）。言葉を掛け合うまでは、どなたも厳しい表情をしています。当たり前でしょう。見ず知らずですから。この五百年程、ビクビクとしてきたのですから。戦う動物には、白目が有りません。目の動きを悟られない為だそうです。人間は、眼がものを言います。ところで、これらの挨拶の言葉の由来は、ポルトガル語の様です。自分達の、否、自分の言葉を持ちたいものです。例えそれが、恋人にも理解されないとしてもです。「連帯を求めて、孤立を懼れず。」

写真→

ファトベシ（鉄より硬い石）の村の女の子。
意思（石）強く腕を組んでポーズを取りました。
「やらせ」では、ありません。程好い色気と、危ない
仕草を感じさせます。私が、もう少し若かったら、
喜んで畏に嵌ってしまうかも・・・？



タイ王国では、トッケーと呼ばれるトカゲが、此処では、テキと呼ばれています。鳴き声が、「トッケー」と、聞こえます。タイでは、その鳴き声が7回以上聞こえると、良いことがあると言われている位、鳴く回数が少ないのです。ところが、DILI で聞く鳴き声は、8回、9回と多いのです。きっと、幸多き予兆なのでしょう。但し、エルメラでは、聞いたことがありません。

生卵を買おうとする時には、その卵が新しいか、古いか見分ける力が必要です。養鶏業者など居ません。勿論卵は、有精卵ですが、古ければ流石に黄身が崩れたりしています。村人は、鶏を沢山は、飼っていませんから、少ない鶏が産む卵をある程度貯めてから市場に出すのです。当然、新鮮な卵もあれば、古い卵もあります。私の子供の頃には、見分け方を親から教わったものです。さあ、日本では、どうやって見分けていたのでしょうか？此処では、光に翳して見えています。

インドネシア時代に公務員だった東ティモール人に、インドネシアが1999年9月以降の2年間の保障として年金のようなものを支給することになりました。50数年前の賠償にも言及しないどこかの国とは、大違いです。が、その時の書類に、「インドネシア国籍を継続しますか？」という質問項目があったそうです。「はい。」と記入すれば、年金は、一時金としてではなく、継続して支払われると書いてあったそうです。果たして、この意味するところは、何だったのでしょうか。

エルメラで新たに開所される保健所支所の修理のためにその村の大工さんと契約しました。その大工さんと材木の購入に行った時の事、彼には全く木を見る眼がありませんでした。こんなことで仕事は、大丈夫だろうかと不安に思いました。数日後、前触れもなく仕事場を見に行きました。何と、鉋やらの道具も自分で作った見事なもので、「腕」もそれなりでした。安心しました。解らないものです。

9月21日、遂に川口みどりさん（助産婦）が、離帝する当日です。通算2年程の働き、ご苦労様でした。現駐在員中唯一テトゥン語を操れる人でした。SHAREとしての対話力が大幅に低下することは、否めません。私が、やっと二ヶ月の滞在、東ティモールの二歳児よりまだしゃべれません。みどりさんと話していた中で、「私達は、考えてみると少数者の言語ばかりを勉強しちゃったね。」というのが、印象に強くあります。普通は、多数者の言葉である英語、仏語、西語、北京語、露語などを勉強しようとするのに、私達二人併せても、タイ語、カンボジア語、ウガンダ語、ウルドゥー語、テトゥン語等で一億人をやっと超える位です。「マイナー」が肌に合ってるねと、ひしひし感ずる二人でした。

同9月21日の新聞に、第二次暫定政府閣僚名簿が発表されました。更に、新国家作りに近づいたという実感です。

国連関係者の引き上げが始まっています。10月以降は、借家の家賃等が、値下がりしだすでしょう。この国に落ちる外貨（米ドルが法貨の時にもこういう言い方が当てはまるのでしょうか？）も、激減することでしょう。これからが、正念場です。インドネシア時代を懐かしむのか、国連暫定政府時代を懐かしむのか、当面身の丈の国作りに徹することができるのか。どこに立つかによって、方向性が随分と変わることでしょ。

縷紅莊主人

高塚政生 記